

第1回 河内長野市総合計画審議会（正副部会長会議）

日時：令和6年10月30日（水）

午後6時00分から

場所：庁議室

1. 開会

嘉名会長：ただいまより河内長野市総合計画審議会、第1回目の正副部会長会議を開催する。嶋田副会長はWEBでの参加である。各部会の部会長、副会長は部会の進行をされたと伺っているおり、後ほど各部会で実施されたワークショップについてご報告いただく。

2. 議事

（1）これまでの分析・意見収集の整理について（報告）

①事前の分析結果

→事務局：（資料説明）

安部委員：今後、日本全体の人口減は避けられないし、南河内地区でも減少するだろう。河内長野市の個性を磨いて、河内長野市を選択して来てもらおうという趣旨だと思う。大きな人口減が避けられない中で、有名企業が富田林市に行ったが、あのような大きな企業やスーパーが入ってくる時には、河内長野市の人口だけではなく、富田林市や大阪狭山市も含めた南河内エリアの商圈人口を見て、コンサルなどが出店計画をアドバイスすると思う。そういった観点が必要ではないか。自治体という行政単位があり、それぞれで計画を策定せざるを得ず、各市が考えてやるべきなので、すぐには無理だと思うが、南河内エリアで今後どうするかについて、富田林市や大阪狭山市と協議をして広域でも考えていく必要があるのではないかと。一部では広域行政で既に動きもあると思うがそういう観点についてはどのようにお考えか。

事務局：今も様々な連携枠があり、河内長野市では3市2町1村（富田林市、河内長野市、大阪狭山市、太子町、河南町、千早赤阪村）の枠組みで連携の協議体を持っている。そこでは色々な活性化についての議論ではなく、どちらかというと広域連携による業務の効率化がメインになっている。一方、河内長野市、和歌山県橋本市、奈良県五條市の3市での枠組みもあり、こちらについては観光やスポーツでの連携を毎年検討しながら進めている。本来は競争相手と捉えてはいけないのかもしれないが、どうしてもそうなる。

三村委員：ワークショップを4回やらせていただいたが、課題をどうするか議論はしな

いという意図を持ってやらせていただいた。市民が参加して、どうやったらワクワク感が出るかという話が大事ではないかと思って、そのような趣旨でワークショップをしてきたので、みんなが夢を語る場を持てた。当然課題を挙げるといっぱいあり、人口の話をしてもしようもないし、経済的な話もあるが、大事なのは、どうすれば誇りを持てるか、帰って来たくなるか、市民の士気が上がるかということである。

先日、調布であったスペランツァ大阪の試合を見に行った。河内長野というユニフォームは目立って、東京なので20人、30人くらいしかファンがいなかったが、河内長野のチームが東京で試合をしているのは感慨深く、とても応援したくなった。もう少し東京在住の河内長野出身者に呼びかけてもいいのではと思ったぐらい、みんな元気だった。

総合計画の基本構想を策定する目的は、市民に河内長野市を好きになってもらうことである。10万人の人口で10年かけて、何か日本一を目指そうというワークショップをやると士気が上がる、そう思ってやってきたし、職員ワークショップの時からそう思っていた。どうやったら安全安心になるか、人口が増えるかの議論ばかりだが、どうやったら河内長野市を好きになるかを考えるほうがよい。総合計画の策定が法定ではなくなり、立ち位置が自由になったという話があった。その立ち位置の議論が大事なのではないか。どんな目的なのか、人口なのか、金儲けなのか。個人的には、どうやったら河内長野市を好きになるかがよいと思っている。私は河内長野市出身で、地元が大好きだし、人が増えると、その人たちが宣伝して、いい効果が出てくる。

嘉名会長：私も全く同じ印象である。三村委員がもっと関心を持つとおっしゃっていたが、私なりの言い方で言えば、まちづくりが自分事になるということだと思う。行政がやっていることでなく、自分のことになるということを目指す。それは言い換えると、人口が減ると行政も体力がなくなるし、よいまちを作ろうと思ってもリソースがどんどん減るだけ。それなら市民に参画してもらうしか方法がない。それが市民のみなさんの幸せにつながる。そういうやり方で市政を運営していくしかない。

江川委員：随分前だが、アメリカの小さな町が、人口を増やさないことをテーマにした。生活の質を見直していこうということで、具体的には無駄な橋を取ったり、無駄なアスファルト舗装をやめたりした。河内長野ではそこまでできるとは思わないが、そのような取組をしていると、あっという間にウェイティングの人がいっぱい出てきた。

嘉名会長：こういう議論がパラダイムシフトというか、これまでのまちづくりの発想を変

えていくということではないかと思う。このようなことを、計画の入口として打ち出すことがよい。

事務局：現在、人口減少や消滅可能性都市の話がある。分析に基づいて、「河内長野はそんなに悪くない、潰れるような状態じゃない」と言うと、市民はよいことを聞けたと大変喜んでくれる。河内長野市は、魅力がなくなったり、他市に比べて何かが欠けていたりするのではなく、単に一気に作った同じ世代の人口の山があって、70 歳代が膨らむというどこにもない形をしているだけ。それを市民に伝え、とてもやる気になってくれる。

江川委員：人口の増加ではなく、人口バランスが良くなっていることが重要ということ。

事務局：今回の人口分析では、河内長野市の人口が開発で急激に増えて、それが減ってきているが、住民が入れ替わっていることがわかった。これから人口は減るし、10 万人に戻ることもない。開発団地が、どこで普通の馴染んだまちになっていくかということだと思う。おそらく 10 年後にそうなるまちが生まれてくるので、そのまちの中でどんな生活ができるかを描いて、そこに期待を持てるようにしたいと考えている。市民は気持ちがすごく落ちているので、「このまち、ええで！」とたくさん言ってもらうことが必要。ここ 7 年くらいの 0～14 歳の転入数は大阪狭山市と変わらなくなってきた。

事務局：最初のページの 3 つめに「新たな開発を誘導するのではなく」と書いている。いろんな立場の人がおられて、もっと大阪狭山市みたいにどんどん開発を進めないといけないという立場の人もいると思う。しかし、空いたところにはちゃんと次の人が入って来るといった状況が一部の地域では起こっているし、5 年、10 年前には物件が出て買い手が付かないと言っていたが、物件が出れば買い手がつくようになったと不動産事業者の反応も変わってきている。居住者の循環というところでは期待しても大丈夫だと思う。ただ、人口構造上、上が重いピラミッドになっており、亡くなる方が増えて人口が減るのは仕方がない。そこで空き家がどんどん増えて放置されるということが起こらないように、5 人家族が 2 人になって、さらに亡くなったところに 3 人家族が入る。昔 5 人いたところが 3 人になるので減るが、空き家だらけになってまちが荒廃するということではなく、居住者が循環することによってまちの向上をめざすということが一つのポイントである。

三村委員：分析は非常によくわかるし、事実だと思う。総合計画は、人口が問題だからやるという立ち位置なのか。それはもう置いておいて、大丈夫ですよと 3 行ぐらい書

いて、人口は全く問題ないから今後の夢を語ろうというようにしてはどうか。例えば、さきほど会長がおっしゃったように、参画を促すようにしようとすると、Yahoo!で配信するような人があと20人ぐらいいれば、ものすごい発信力になる。参画して好きになってくれる方々をどう増やすかという立ち位置もある。

事務局：何を総計で表現するかということかと思う。

嘉名会長：書いてあることが間違いだとはだれも言っていないが、強調すべきことはこれなのか、違うところに比重があるのではないかということである。また、例えば、自治会長などの立場の方は、おそらくこのようなことを心配していて、「そうじゃないですよ」と心配を解くのは大事だが、次の総計は、そのような立場の市民だけではなく、一般の市民が見た時に興味を持てる内容にすることが重要かと思う。もしこのような内容を書いたとしたら、全く関心がなくなる人もいると思う。それは調整区域の人である。ニュータウンの人は関心を持つかもしれないが、そうでない人は「俺らは河内長野市民ではないのか」と捉えるかもしれない。面積でいうと圧倒的に逆である。里のほうが持続可能性という意味では危機に瀕している。いろんな人達が、元気が出るものを目指すということを最初にはけるとよい。

松端委員：大阪府内では、どこでも必ず人口問題が出てきて、同じような議論をしている。南河内エリアでの取り合いもあるし、泉州エリアや和歌山ともある。しかし、総計としては必要かもしれないが、おそらくそこに市民は関心を持たない。福祉では特に住民自治を重視しているが、自主的に自分たちのまちをどうよくするか、暮らしをどう守るか、どう支え合うかが重要である。背景としてこれはあってもいいし、必要な分析だが、前面に出す時、住みやすいまちにするには、行政任せではなく市民が自ら関わっていいまちにしていけないと、なかなか魅力が出ないことを伝えたい。河内長野市の魅力はなにも変わってない、構造上人口が減っているだけなら、それを市民の人達が日々実感して共有できているかということ、それを確認する機会もないと思う。活気が出る仕掛けをどう盛り込むかがあるといいと思う。

事務局：河内長野で暮らすことが楽しい、心地よいと思ってもらうことが、非常に重要だと感じている。そのきっかけは、例えばサッカー、スペランツァ大阪が来ることによって元気になる高齢者がいて、誘い合う。先日も、服部緑地に最終戦を見にいったが、大勢が応援しに来られていた。それによって、河内長野がいいとその人達が思ってくれて、コミュニティが広がる。コミュニティも、自治会だけではなく、多様な新しいコミュニティをどう生んでいくかが河内長野で非常に大事になる。

松端委員：地縁組織が強いが、それに頼ると衰退は間違いない。多様なコミュニティが必要である。

嘉名会長：次の議題に進む。

②意見収集のまとめ

事務局：（資料説明）

<質疑>

（特に議論なし）

（２）第６次総合計画の基本構想の構成（事務局案）について（協議）

①これまでのまちづくりと基本構想のキーコンセプト

事務局：（資料説明）

<質疑>

嘉名会長：ここに書いているワークショップやアンケートは、去年から始めているのか。

事務局：基礎調査などは去年から実施している。

嘉名会長：まとめだけではなく、生データが見たい。

事務局：第１回では、個別意見のものを含めてお出しした。

嘉名会長：第１回のワークショップの議事録はないのか。

事務局：第１回の審議会で抜粋版をご提示した。

事務局：かなり量が多くなるが、出た意見は抜かずにお出ししている。作業部会も含めて、資料としては全部出している。

三村委員：６つの中で１番はどれか。

事務局：総合計画の話であるので、「愛着」とか「これからの成長」、「これからの未来」が一番表現をすべきところかと思う。

三村委員：それなら「愛着」と「成長」だけでいいと思う。そのための「安心」「自然」「つながり」「1000年継承」ではないか。

事務局：そこはベースにあると思う。

三村委員：「愛着」と「成長」どちらが上かだと思う。「発展」することが大きな目標で、「愛着」を考えて、そのための「安心」「自然」「つながり」。「継承」は別かもしれない。

事務局：「継承」も歴史や文化であり、ベースになる「愛着」を生むような、「発展」につなげるものなので、「安全」「自然」「つながり」「コミュニティ」や「継承」は、これからの市民のシビックプライドや、愛着づくり、成長につなげるためのベースの要素であることは間違いない。

三村委員：「愛着」と「成長」がもっと目立つほうがいい。

安部委員：どうすれば愛着が持てるかが必要。世界できれいなまちは、自然も含めて景観がいい。また、歴史も含め、文化的なものが残っているということ。さらに、人付き合いがかなり多様である。単純に「愛着」と「成長」の2つのスローガンでもいいと思うが、「愛着」を裏付けるようなものがあると良い。

事務局：それなら、前の4つ「安全」「自然」「つながり」、また「1000年継承」には、街並みや景観も含まれていて、2つのことを高める要素という位置付けにすることも考えられる。そういう位置付けで、一番は「変わらない約束」、もう一つは「つながる未来」ということでまとめている。

安部委員：河内長野で「これ好きでたまらん！」という典型的な市民はいないか。NHKには「好きで好きでたまらん！」という人が出ていた。

事務局：最近、特に市外から来た人がよく言っている。市長も河内長野生まれではないが、受け入れてくれる市の包容力、人のつながりが凄いとやっている。市長以外にも外から来て、ものすごく河内長野を好きになって、中心になって活動されている方が多い。

安部委員：河内長野には排他性がないということかと思う。それがなぜそうなのかが欲しいところである。

三村委員：そこが、「なぜ好きか」のアピールポイントになるのではないか。

事務局：江川委員も河内長野を好きになってくださっていると思うが、いかがか。

江川委員：空気、自然、水。丘と歴史街道があり、バランスがよい。

事務局：河内長野は市が好きな人が増えて、活動が増えているという印象がある。市が何かしたいと言えばすぐに集まってくれる。

嘉名会長：誤解を恐れずに言うと、私は「今後のありたい姿」に物足りなさを感じる。なぜかという、自分事ではなく「そんな環境ならラッキー」というような、「モールができたらいいな」ということに近いような印象である。それはそうだが、それだけではなく、生きていることが自己実現につながるという意見をうまく引き出さないと、自分事にならない。聞き方はすごく大事で、神戸市の総合計画だと、「神戸のこれからをみんなで話そう。」という言い方をされていて、みなさんが神戸で実現したいことを聞いている。市にやらせたいことを聞くのではない。その微妙なニュアンスの違いがちょっと物足りない。基本計画も策定することになるので、これからやるべきこともまだあると思うが、やはり「何を求めますか」と聞かれたら、「これと、これと、これを求める」となる。しかし、それは他者に要求していることになる。その価値観を変えていくようなことがほしい。

安部委員：これをベースに、マスタープランは別の委員会などを立ち上げてつくるということでよいか。ここでは、前提となるような河内長野のイメージや構想を作っていくということか。

事務局：今までは、都市構造で、どんな拠点を配置するかを将来都市像として描いていたが、今回はそうではない。「こんなまちになったらいいな」「こんなまちになればワクワクできるな」というものを表現したい。

三村委員：私はワクワクしている。ワークショップをして、こんなに真剣に考えている人がたくさんいて、いろんなアイデアが出てきた。みなさん説明も上手だし、人もいい。

嘉名会長：どういった属性の人に参加してもらっているのか。無作為抽出に近いものか。

事務局：申込制である。

事務局：これまでのワークショップの参加者は、いつもよく見る顔ぶれであることが多かったが、今回は全く雰囲気違って、楽しそうにまちの将来を話していてとても良かった。

嘉名会長：実際にまちづくりを自分事と捉えて取り組んでいる人の意見もどんどん聞いたらいいと思う。

事務局：万博に向けた取り組みとして、「つながる河内長野」ということで、色んな団体がつながって、色んな市民がつながって、みんなで万博に行こうという取組をやっている。この秋から一般募集でメンバーを募ってやろうという時に、万博となると獅子舞さんとか、いろんな団体が入ってきてくれるし、万博は、河内長野市としては、つながって後のコミュニティづくりにつなげたいと思っている。

中道委員：私がこれを見ていて思ったのは、「安心」は何を置いても土台だと思う。その上に河内長野の魅力である「自然」と「歴史」、これが特性だと思う。そこに人。「つながり」も「成長」も「愛着」も人なので、この絵の上にかくに人達がピカピカするかということ。「つながり」も無理やりだと絶対楽しくない。万博というネタでみんながワクワクして集まれる状況をつくろうとしていると思うが、来たら面白いまち、面白い人と出会えるまち、その「面白い」を応援する市であってほしい。今は自治会も何かやらされたら大変だから逃げまくる、PTA もなくなる、子ども会もなくなる。しんどい状況を単なる保護者と子どもの関係性だけで突き放されると、もうやめますとなるが、そこでつながる力を持っている河内長野市民が、そんなに頑張らなくても、自分たちが手伝おうというまちであれば、30 代の女性も来る。なぜ来ないかというと、やはり子育てしにくいと聞いているからである。

私が何のために大阪市から河内長野市に移ってきたかということ、保育所で子どもを育てなければならなくなったからであり、本当にお世話になった。子どもたちは河内長野の家を売るなど言っていて、河内長野が大好きな子になった。それは、保育所で保育士さん達に子育てのお手伝いしていただいたおかげだと思っている。自然に川で遊ぶとか山に登るとか、日常的に保育所で手厚く手間をかけてもらって、愛着を増して河内長野に戻ってこようとしている。人は人をつなぐ、楽しい思い出の中でつながれていく、でも私達の子どもの世代では、十数人いたうち、5人が富田林に移った。河内長野で育って、これだけいい保育をされていた保護者が、富田林に引っ越したのはなぜか。学童保育は河内長野4年生までで、富田林は6年生までである。親はそういった情報をちゃんとキャッチしているので、安心して子育てできないと動く。家があってもそれを売ってでも動く。それぐらい子どもが大事な保

護者にとっては、安心して育てられない要素が少しでもあれば来ない。土台になる「安心」はとても大きな条件で、その土台をしっかりとするのは多くは市の仕事だが、その後に特性である「自然」と「歴史」を活かして、どうやって人と人が楽しくつながれるか、面白いまちにできるかをみんなで考えられたらいいと思った。

嘉名会長：次の議題に進む。各部会のワークショップで出た意見やアイデアを順にご報告いただく。

②河内長野市の将来に向けてありたい姿

■第1部会

松端委員：雰囲気という、参加者が他人事で課題を客観的に述べるのではなく、自分たちが愛着をもってこのまちをどうしていきたいか、自分ならどうしたいか、どう関わりたいかと自分目線で発言している方が多く、とても盛り上がった。あんな空気感、取組を全市的に広げていかなければならない。関心ある人だけだと内輪の議論になる。あの盛り上がりをもっと広げていくことが大事である。

中道委員：高齢者が元気なまちであることを実感した。自分たちでどうしたらいいかを熱く議論した。高齢者が多いことを逆手にとってメリットに変えて、高齢者のパワーを生かして、困りごとをみんなで解決する流れができないかと思った。

嘉名会長：自分自身の自己実現にもつながる。自分の存在価値もあり、なおかつ地域もよくなる Win-Win の関係。そういった方が主体的に部会に加わっていただいている。それをどう広げていくかだと思う。

松端委員：女性の若い公募委員の方や、学生さんが入ってきている。若い人にも入ってもらいたい。

嘉名会長：「免許を返納しても困らないまち」とある。

中道委員：それは私が言いました。今は免許を返納すると生きていけない。

嘉名会長：「泊まりたくなる」「希望者が全員学童に入れる」もある。

松端委員：学童には「小1の壁」というのがある。他市に移られるのもそれがあつため、安心して子育てできる、働けることが重要である。

■第2部会

江川委員：農業関係、林業関係の方がいらっしゃって、里のことも含めて、河内長野には生産力があるので、それを市民の喜びにつなげるという意見が出た。若い人も参加できて、最終的には専門になる人も出てくるような、他にはないポテンシャルが、河内長野にはある。圧倒的に緑も山も多い。農業ブランドで河内長野市民であることの喜びを感じる、参加して楽しむということ。そういった話題で盛り上がった。また、大学があって若い人がいる、訪れた人が泊まっていけるような、みんなが長く滞在できるような環境。若い人が交流できるまち、10年後にはそうなっているといいなという話が多かった。最終的には、多様な選択肢や豊かさ、魅力を、それぞれが実感できるまちになればいいということを話した。

安部委員：みんな活発に話していたが、書かれていないことで驚いたのは、市役所の職員の人が頑張っていることである。私は40年住んでいるが、過去の経験の中では、市役所の人は自分の仕事の実務は頑張るが、将来像を語ったり、業務以外のことをやったりしているように見えなかった。しかし、今回いきいきと取り組んでおられることに感動した。それはとても大事である。情報は市役所の職員がいちばん多く持っている。その人達が熱心に取り組んでいるのを見て、安心した。それが部会で一番よかったことである。

■第3部会

嶋田副会長：防災防犯の部会なので、意識が高いことが意見として反映されていた。誇れるものとして、防災防犯は突出して良いまちだということで、もっと大切にしていきたいということ。その基盤は自主防災で市民が支えている。あとは市民参画で、市役所の人が頑張っているが、コーディネーターにならないと、つながりたくてもまとまらない。市役所にはコーディネーターとしての役割が期待されていると思った。住みやすさや愛着はキーワードだが、愛着のためには利便性が高くなければならないことを考えると、DXや、移動しやすいまちということで、クルクルのようなものをもっと増やすことが重要という指摘があった。もっと攻めないといけないという話で、情報発信だが、本当の意味でどうかと考えた時に、河内長野の駅は使われている感じがしない。市のアイデンティティが伝わるようなものを工夫すれば、駅に降り立った時に、「このまちはこんなまちなのだ」ということがわかり、もっといろんな人が興味を持ってくれるのではないかな。愛着は、今住んでいる人や縁のある人が持つものなので、広がりを持たない。攻めるということであるなら、もっと外の人にも知ってもらわなければならない。駅を活用した営業活動もあっていいと思った。最後に子育てだが、ここは大きなポイントだと思う。子育て世帯は何か

あればサッとそっちへ行ってしまうことがある。保育士をどこから連れてくるかという問題もあるが、それも含め子育て世代の心を打つようなことをしないといけない。最後は健康。高齢者が多いので、環境を整えることによって健康寿命を延ばすということを目指せば注目されるようになる。10 年後はそれぞれを伸ばせるようなまちになればよいと思う。

三村委員：一言でいうと、「おもろいことでつながるまち」。どんなつながりか。消防士の人は、「防災の時は、高齢者には必ず若者の手伝いがある。若者が高齢者を助けないといけない」と高齢者に伝えて、地域の若者と高齢者がつながるような施策を展開すればよい。また、だんじりのメジャー化という人もいた。今は高野街道祭りもなくなったようだが、もっと市民参加型のイベントを増やすということ。あとは住みやすさ。自動車は、10 年以内に自動運転になると思われるので、その点は大丈夫ではないかと思っている。子育ては、先ほどから言われているような話があった。

嘉名会長：泉州と南河内の共通の課題として、ブランディングの問題がある。淡路島の玉ねぎは 200 円で売れるが、泉州産は 100 円で、それは良さを伝えられていないということである。買う方はみんな知っていて、くろまろの郷が賑わっているのは安いからである。

事務局：市内の米穀店が「仕入れ値より安い」をやられるとどうしようもないと言っていた。

嘉名会長：道の駅でも有数と聞いている。こういった皆さんが前向きに出していただいたアイデアをしっかり総合計画に盛り込んでいくことが大事。都市計画をやっている立場としては、耳の痛いこともいっぱい書いてある。私もいろいろお手伝いしているが、左にも右にも前にも後にも動いていないものがたくさんある。ご指摘はごもっともだと思う。次は、実際に総合計画にうたっていく河内長野市の将来像についてディスカッションしていく。ここからは自由意見というか、みなさんの思うところを伺う。

三村委員：あとは、他市との違いの特徴的なところがたくさんある。先ほどのサッカーの話もそうだし、子育てに関しては、大阪千代田短期大学という保育科があり、保育士をずっと輩出している大学があるので、そういったことが影響しているのかもしれない、調べていないがそれで保育士が足りないことがあまりないのかもしれない。あとは、他市に絶対ないけど河内長野市にあるもの、サッカーもそうだし。それがもう少し表に出てくればいい。大学をアピールするのは無理かもしれないが、子育

ての観点からは魅力を感じる。プロの保育士をずっと育てている大学がある。サッカーも女子サッカーなので、そういった他にない特徴的なものが表にでるとらしさが出てくる。滝畑ダムがあれば水に困らないとか、水が綺麗とか言っている人もいたが、目的があって、施策のところ、他市では絶対ないようなものが出てくると特徴が出る。研究で言うとオリジナリティが出るというか、そういう話が見えるといい。サッカーをアピールしたら野球をやっている人は「野球はどうするんだ」と言うかもしれないが、特徴的なことであるので、他市にない特徴みたいなことが、最初に並ぶと面白いのではないか。

江川委員：水もそうだが空気が大事。

安部委員：そういったものを考えればキャッチが出せる。

事務局：ブランディングで子育て世代に集まってもらって、葉っぱに好きなところを書いてももらったが良い意見があった。若い人でも利便性、子どもらは利便性だけで出て行ったが「環境が良くて」と考えている人は非常に多い。それと、行政は利便性が悪いと考えているが、意外と便利だと言う。

江川委員：環境が良いと戻ってくる。フランスの田舎もそうである。みんな戻って来る。おいしいものがある、景色が良くて、他に何があるのかという感じになる。あと1つ、南花台の「だんだんテラス」をやっていて思ったこと。当たり前だが、子育てしてまちに戻ってきた、子育て前はしょっちゅう飲みに行っていたが、子育てしだしてから飲みに行くところがない。「だんだんテラス」で、みんなで持ち寄りで行っていたら子どもを連れてくる。若い子育て世代が行ける店がない。しかも住民がやっていて安心感がある。

事務局：おじいちゃんが来たら子どもも来る。

嘉名会長：昨日、夕方ある場所でワークショップをしていたが、まさにそんなことを言っていた。子どもを遊ばせながら酒を飲みたい。

中道委員：地域にせっかく保育士を輩出する大学があるのと、元気な高齢者を結び付けて、河内長野市も保育士が足りないという話をタイアップして、頑張りたい高齢者向けの保育士取得講座のようなことを大学と協力して行う、市の課題を解決するのと同時に、高齢者の方が輝くチャンスになる。河内長野市にあればボランティアもそうだが、退職された後にもう一度新しい人生を描けるというような、課題解決につな

がるようなこと、生涯学習の展開というのも鍵になるのではないか。子育て支援のための学び。

江川委員：国は将来、年をとっても働けと言っているが、昔は働かなくてもよかった。

中道委員：働きたい高齢者もいる。働きたい人は働き、働きたくない人は働かないというのが選べるまち。自分の生き方を選べるまちになればと思う。

嘉名会長：堅苦しい言葉で言うとしスキリングとかになるが、一方でそういうことをやろうとしている人々にとっては自己実現になる。そこをうまく重ねることをやっていくのが大事。

中道委員：千里ニュータウンの出身だが、河内長野市は大阪市民（府民）にとっては田舎である。都会から 30 分で行ける場所（田舎）で、その環境を楽しむ、蛍や川遊びを楽しむことをもっと打ち出していったら良いのではないか。山村留学、短期間、2 日 3 日だけ、里の方の協力を得て、農家に親子で泊まってもらいと、よい。よそでやっていなくて、都会の子が知らないことで呼び込む。歴史と自然のまちの強みを生かしてほしい。

嘉名会長：「1000 年」以外はほとんど河内長野らしさが出る言葉でない。言葉磨きをしないといけない。「自然」と言ってしまうと、それはそうなのだが、先ほどの江川先生の表現だと、空気がおいしくて、そこで暮らしている幸せも表現されている。

江川委員：自然についての議論があって、捉え方が全然違う、それがまだ超えられていない。

嶋田副会長：私も「愛着」は非常に「なるほど」と思うが、最初から強烈な違和感があるのは「成長」。それを聞いただけで嘘っぽく聞こえる。国も何度も「成長」と言っているが、いつも裏切られている。計画の中で安易に使うと絵に描いた餅だよねという不満を惹起しかねないので、もう少し工夫する必要がある。河内長野らしさ、例えばサステナブルとか持続可能かもしれないが、それも少し言葉としては堅い。「成長」「活力」「ワクワク」「どんどん」ではなく、ほっとするような環境を長くみんな大事にしていこうというイメージを私は持っている。ワクワクからは遠ざかるが、等身大ではないところまでいかないほうがよい。言葉選びは慎重にした方がよい。

嘉名会長：ありがとうございます。これはメンバーの人が思った「成長」と、世の中に流

通している「成長」の概念のずれだと思う。成長は、自分が学習して学んでよくなっていくというイメージだが、後者は国家が右肩上がりの成長戦略のイメージである。

事務局：ブランディングには「成長」はなかった。全体的に捉えようとした時に、人が生きる中で成長できる場のイメージであった。

嘉名会長：人生に寄りそう、人生の舞台をつくるなど、表現の工夫だと思う。

事務局：もともとは変化し続けると言うのが残って、自治会も回覧板だけではなく DX など、変化し続けることも大事だということがあった。

嘉名会長：変化し続けるという言葉もわかりにくいので、ニュアンスを共有して、いい言葉を打ち出していく、それが結果的には河内長野オンリーの総合計画の枠組みになる。

事務局：構想と基本計画がつながらなければならないので、どの言葉で繋げていくかと考えると、言葉が基本計画において、そこから枝分かれして、構想に結び付く個別施策になる。そのような意味で、何かつなぎの言葉入れるために選んだ言葉である。成長は、教育や子どもの成長、高齢者の生きがいのイメージで入れておかないと、基本計画につながらない。

嘉名会長：基本構想はどういうものなのか。例えば、これは神戸市の基本構想だが、これだけしかない。文章だけ。しかし、かなり練り込まれていて、全部のエッセンスが入っている。市民に神戸市の将来像を非常にわかりやすい文章で書いてあるが、従前からはかなりガラッと変わってしまっている。今までは項目別を書いてあったが、それさえやめてしまっている。

事務局：本市もそれをやめようと思っていて、新しい言葉として書いている。

嘉名会長：項目ごとに打ち出す手前で、文章やポエムでもいいのかもしれない。

(3) デザインチームの参加について（報告）

事務局：次の総計は、子どもでもビジュアルで理解できるものにしたいと考えている。

事務局：（資料説明）

嘉名会長：2010 年に島根県の海士町の総合計画を、スタジオ L が作った。「島の幸福論」というもの。町民ほぼ全員にヒアリングをして、それぞれが何をしたいかを聞いていって、その積み上げで総計をつくってグッドデザイン賞を取った。海士町は総合計画を作るだけで日本全国から知られるまちになった。ブランディングというなら、この総合計画で、「さすが河内長野、やるな」言われるぐらいの意気込みでやっていただきたいし、ここにいる委員のみなさんもそんな思いでやってやろうと思ってくださっていると思う。今までにないものを作りたいと思いますので、引き続きよろしくお願ひしたい。

3. 事務連絡

(なし)

4. 閉会